

【 1 】

氏名	齋藤義一
	さいとうぎいち
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第93号
学位授与の日付	昭和49年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	ドイツ観念論における実践哲学

論文調査委員 (主査) 教授 武内義範 教授 野田又夫 教授 辻村公一

論文内容の要旨

本論文は二部門からなっている。第一編と第二編とではカントの実践哲学が論究の対象として取り上げられ、第三編ではフィヒテが主題となっている。この論文はカントからフィヒテに至るドイツ観念論の前半の思想の歴史を解明するために、この二人の哲学者の主要著作を広く渉猟し、綿密に考察した労作といえる。とくに両者に於いてそれぞれに独自ではあるが、しかしまた根本性格に於いて共通している自覚の論理が、宛も後波が前波を追うようにして展開して行く姿をとらえた手腕は見事であるといふべきであろう。

第一編第一章第二章では、カントの自由の概念を、主として第一批判と第二批判によって解明し、この自由の概念を、当然のことながら、カントの実践哲学の全体構造の中心に据える。しかし本篇に於ける著者のもっとも大きな貢献は、後述の如く第三章『宗教論』に於ける自由の構造のうちに見出される。著者は、カント解釈の根本の立場を、後期の田辺哲学の絶対批判の方法からの著しい影響のもとに、確立している。田辺哲学では絶対批判は、この哲学の長年にわたるカント哲学への沈潜と対決との後に結実した、「絶対弁証法」の体系的な方法論の一面であった。しかし本論ではこの方法はさらに一步をすすめて、カントの諸著作を具体的な内容にしたがって分析し記述する場合に、その自覚の発展と深化の諸段階を漸次に追求して行くための内在的批判の原理として働く哲学史的方法に発展させられている。

そのことによって著者はカントの実践的自由の思想が彼の『宗教論』にいたって、キリスト教の原罪の観念を媒介とすることにより、従来の理想主義の甘さを脱して、人間存在の有限性と罪障性の自覚の深みに到った所以を明確に跡づけ、またカントの『宗教論』の「悪への性向」・「叙智的行」などの概念の深淵的性格に、鋭い省察を加えることができた。

とくにこの根源悪の自覚を通じて、カントが「心術の革命」と称したこの罪からの救済の問題は、カント倫理思想が従来そこに止っていた個人主義の立場を超克することに余儀なくせしめた。この問題はカントを人間相互の連帯性にもとづいて共助共力しつつ働く愛の協同態の理想にむかって一步前進させること

となったが、著者はこの宗教的社会観に対してさらにカントの第三批判の立場——とくにそこに展開される倫理的目的論——を媒介として、論理的整合的な解釈を試みた。その結果カントの所謂「目的の王国」が歴史的世界に実現せられることとなるようなこの新しい目的論の著者独自の理解は、論述の緻密と宗教的自覚の透徹とによって、容易に他の追従を許さない高みに達している。

第三篇「フィヒテの研究」は、フィヒテの前期知識学に於いて打ちたてられたカントの自由の理念の新しい「実在一観念論」的自覚の方向が、その後どのような変易をたどって行くかに主力をそそいでいる。著者は、ヘーゲルがフィヒテの哲学を厳密な意味での学的業績と通俗哲学とに二分し、前期知識学以外の『人間の使命』『浄福なる生への指示』などの著書の哲学的価値をみとめない見解に反対している。著者によれば、これらの著書に——後期知識学の深みに導き、ついにヨハネ福音書を思わしめる宗教的生命観に溢れた神秘主義に、彼をたかめることとなった——フィヒテの晩年の新しい「生命—存在観」への参入の端初がみられるのである。

フィヒテは晩年（1801年以後）にもあくことなく『知識学』の新しい体系の試みをくりかえしている。これらの晩年のフィヒテの思想が重要なことは、多くの学者の予感するところであったが、我国では著者によってはじめて彼の独特の「像の理論」の諸側面、その思索の動機、一作ごとに段をふみしめるようにして、自己の根底に下って行くフィヒテの深刻で強靱な思索の全貌が余すところなく解明せられた。この点は劃期的な業績であるといわなければならない。

論文審査の結果の要旨

著者のカント・フィヒテの研究は、田辺哲学のカント・フィヒテ批判に深く影響せられているとはいえ、一つ一つの問題の解釈の具体的内容に即してみれば、氏の独自の解釈が、精彩を放っていることが知られる。もしこの論文が西欧の学界に紹介されるならば、独自の貢献として高く評価せられるであろう。ともかくカントとフィヒテの思想を哲学的にあくまでもザッハリッヒに追求しながら、しかもまた論理的に統一的な見地から把握しようとするものとして、近来本論文の右に出るものは存在しない。

本論文はカントとフィヒテに限られていて、論著の『ドイツ観念論の実践哲学』という課題に対しては一半おおうものにすぎない。著者はすでに「シェリングの宗教哲学」等についてすぐれた研究を発表しているので、シェリング・ヘーゲルに対する著者の研究の完成をまちたい。猶、本論文ではカント・フィヒテの我国及び西欧学界の研究のうち重要なものは概ね論及され、論者のそれに対する批判が加えられている。しかし、1950年以後のものについては、論述されることが比較的すくない。とくにフィヒテの場合、彼の後期の知識学は、最近ドイツ学界の注目をあつめている。勿論それらの著書は、この論文と同じ年代乃至はその後に出版されたものが多く、著者がこの書のうちで論及されていないのは当然である。しかし他日それらについても論及せらるることをのぞみたい。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。